

私に力をくれた夢

岩手県釜石市立釜石中学校

二年 鎌津田 結

私には小さい頃から憧れる職業がある。それは、客室乗務員である。憧れるきっかけとなったのは、初めて乗った飛行機でのおもてなしで感動をもらったこと。私はあの体験をした日から、客室乗務員になることを夢見ている。

初めて飛行機に乗ったのは五歳のときだった。親戚の結婚式に参加するために飛行機に乗ってでかけることになっていった。初めての飛行機での旅が待ち遠しく、毎日楽しみにしていた。

飛行機に乗り、座席に座ると間もなく、すてきな制服を着たお姉さんがまだ小さかった私の荷物を片付けてくれたり、シートベルトの締め方を優しく丁寧に教えてくれたりした。そのときのお姉さんの笑顔はとても温かかった。離陸直後の機内で「それでは快適な空の旅をお楽しみください。」というアナウンスが流れていたことも強く印象に残っている。

離陸からしばらくが経ったとき、母からの提案で客室乗務員のお姉さんに絵を描いてプレゼントをすることにした。とても誰かにあげられるような絵ではなかったことを覚えているが、それでもお姉さんは嬉しそうに

「ありがとう。」

そう笑顔で言って優しく受け取ってくれた。

初めての飛行機での旅が終わろうとしていたとき、大きな荷物を抱えながら出口の方へと向かっていると、私が描いた絵を受け取ってくれたお姉さんがいた。私を呼び寄せるように手招いているのが分かり、不思議に思っ近づいていくと、そこには私の描いた絵が飾ってあった。描いた絵を受け取ってくれただけでも十分嬉しかったのに、わざわざ私のために飾ってくれるなんて思ってもいなかったのに、驚きを隠せないと同時にとても感動したことを今でも鮮明に覚えている。この初めての旅でたったこの何時間での大きな一つの飛行機の中でたくさんのことを教えてもらった。

また、この旅のあと何度か飛行機に乗る機会があった。そのたび、毎回絵や手紙をプレゼントした。小学校の小学年頃になると夢への眼差しが強くなり、「客室乗務員になるためにはどんなことが必要か」や「客室乗務員には身長などの制限はあるのか」など、客室乗務員を目指す上で気になることを質問として手紙いっぱい書いたことや、たくさん調べて書いた英語の手紙を渡したこともあった。客室乗務員の方は常に忙しいはずなのに、どんな手紙にも返事をくれた。あるときは機内に搭乗していた全ての客室乗務員の方からお返事をもらったこともあった。今までもらったたくさんのお返事は、客室乗務員を夢見る私の原動力となっている。返事をくれた客室乗務員の方の中には「小学校のときからの夢を叶えて客室乗務員になった」という方もいて、とても背中を押された。今まで特に忘れられない体験は、普段実際に着用している制服を着せてもらったことである。大切な冬の思い出となった。

私に力をくれたこと、それは私が九年前に体験した飛行機内のおもてなしである。飛行機はこれか

らもたくさんの人々が利用し続ける。そのたくさんの人々が、私と同じように幸せを感じることのできる乗り物であればと願っている。私が客室乗務員の夢を叶えたとき、私のおもてなしで世界中の誰かひとりにでも幸せを届けることができる客室乗務員を目指したい。

私の同級生の中では将来への道筋がついている人はまだまだ少ないが、それは決して悪いことではないだろう。また持っていた夢を叶えられなかった人や、夢への道を選択せずに新しい道を歩んでいる人も少なくないだろう。しかし、自分が選択した道が「正しかった」と思える日が来るのなら、自分の人生において、とても意味のある選択だったのだと私は思う。

私はこれから先、様々な人と出会い、様々な出来事と向き合っていく中で夢が変わることがあるかもしれない。でもそんなとき、焦らずに、そのとき自分が心から「正しかった」と思える道を進んでいきたい。

今、日本はどんどん機械化が進み、人工知能などといった、高度な技術が発達してきている。しかし私は、人の不安に気付いたり、笑顔のおもてなしを届けることができるのは人間しかいないと思う。

私は今「夢」に向かって一歩ずつ歩んでいる。人の心に寄り添い、笑顔のおもてなしを届ける客室乗務員に。